

日米医学医療交流財団 研修助成

研修報告書 (2014年度 助成者)

作成日 2014年10月22日

氏名 (フリガナ)	山田 優 (ヤマダ ユウ)
研修名・研修地	アメリカ短期看護研修 (アメリカ・オレゴン州ポートランド市)
研修期間	2014年10月12日 (日) ~ 10月18日 (土)
所属機関名	順天堂大学附属順天堂医院
身分	看護師 3年目

私が短期看護研修でポートランドを訪れたのは今回で2回目となります。前回は3年前の大学4年生の時でした。その時はまだ日本の看護も分からず訪れたため、“アメリカの看護ってすごい！将来自分もこんなところで働けたらいいな”くらいにしか感じていませんでした。今回実際自分が看護師として2年半働いた上で、再びアメリカの看護に触れ、日本との違い、共通点を学びたいと思い参加させて頂きました。また、3年前の研修でアメリカ看護に興味を持ち、日本で何年か看護の経験を積み『アメリカで看護師として働く』という目標を立てたため、その気持ちの再確認・モチベーションの維持・向上のためにも参加させて頂いたという事も大きな理由の1つでありました。

実際にアメリカの病院、高齢者施設、大学等を見学し、アメリカの医療について現地の看護師さんなどからレクチャーを受け、日本との違いに驚きました。元々アメリカの医療制度や保険などが大きく日本と異なるため、国民が医療を受ける際にアメリカでは救急車を呼ぶだけでも料金が発生したり、加入している保険によって払う医療費が異なったり、保険未加入者では適切な医療が受けられないため、疾患の早期発見が難しく重症化してしまったり等、日本の医療との大きな違いを感じました。病院の設備1つにしても、病棟等でも機械化が進んでおり、物品管理や薬品管理などは全て機械化され、常時物品が補充され必要なものがない事はなく、使用した物品・薬剤がダイレクトに患者のコストに反映されるなど、日本では普段私たちや他の医療従事者が行う作業が機械で管理されていることも大きな違いの1つでした。ただ違いばかりではありません。もちろん看護の根本である患者中心の看護やチーム医療の考えは日本と相違なく、疾患のみを看るのではなく、患者のバックグラウンドを含めたトータル的なケアを提供する点については日本とアメリカの共通点だと感じました。アメリカで学んだ看護は研修後自分の部署に持ち帰り、他のスタッフに情報提供・共有をすることで今後の病棟の看護、日本の看護にプラスな影響を与えられれば、今回の研修が自分だけのものではなく素晴らしいものになると考えています。

また研修では日本各地の看護師さんと知り合え、看護師の新しい友達ができます。働いている場所、経験年数、年齢など異なった環境の看護師と仲良くなれる。これは研修の大きな魅力の1つだと思っています。普段同じ病院の看護師としか話す機会がありませんが、研修ではいろんな都道府県の看護師が参加するため、都心の大学病院の現状、地方の地域密着の医療の現状等様々な医療・看護のあり方を学ぶことができます。今回私は全員の方が初対面でしたが非常に仲が良く、参加している自分でも「本当に初対面かな？」と思うほど仲良くなれ、本当に楽しい研修となりました。最高の仲間と学ぶ1週間は本当に楽しく、そして本当にあっという間でした。

今回の研修では日本とアメリカの看護の相違点を学び、最高の仲間ができ、私の人生にとって最高の経験となりました。将来アメリカで看護師として働くという目標がかなり近づき、そして確信へと変化した研修でもありました。このような最高の経験をさせて頂いたのも、計画をしてくださった財団をはじめ、ツアー会社、アメリカで留学日程の調整や宿泊施設の提供をして頂いたPSU関係者、アメリカの医療施設のご協力があったの研修だと思っています。全ての方に感謝し日本での看護、自分の今後の目標に向かって、また日々努力していきたいと思っています。